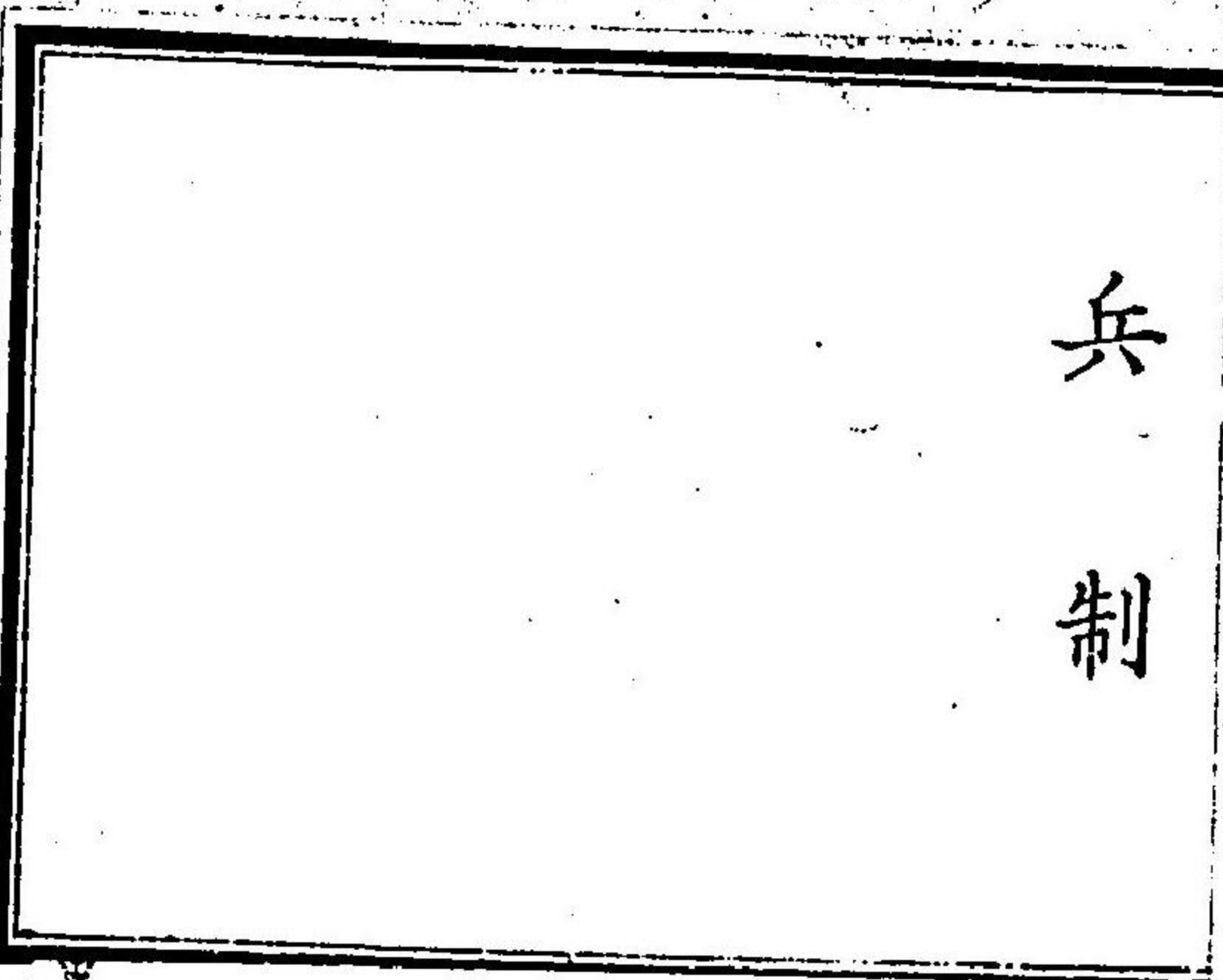


C2  
5  
0122

共  
拾  
七  
本

兵  
制



東 京 圖 書 館

折 門 一 二 函

部 〇 二 架

類 二 一 七 〇 四 號

明 治  
六 年  
布 告 類 編

四

記錄課編纂

明治六年  
各布告類編

明治七年十一月新刊

CS  
5  
0/22

布告類編卷之四目錄明治六年

○兵制

- 一 徵兵令並附錄 四丁
- 一 近衛兵編成並兵額 四十七丁
- 一 徵兵使發遣 五十二丁
- 一 國民軍籍ヲ調査ス 同丁
- 一 鎮臺配置改定 五十三丁
- 一 鎮臺條例改定 五十三丁
- 一 陸軍敬禮式 七十四丁

C2  
5  
0/22

布告類編卷之四目錄明治六年

○兵制

- |            |      |
|------------|------|
| 一 徵兵令並附錄   | 四丁   |
| 一 近衛兵編成並兵額 | 四十七丁 |
| 一 徵兵使發遣    | 五十一丁 |
| 一 國民軍籍ヲ調査ス | 同丁   |
| 一 鎮臺配置改定   | 五十二丁 |
| 一 鎮臺條例改定   | 五十三丁 |
| 一 陸軍敬禮式    | 七十四丁 |

一 頑民暴動鎮壓ノ爲臨時招募ノ  
士族ハ兵士ノ名目ヲ下スヲ禁ス  
八十七

東書

東書  
精製

編卷之四 明治六年

兵制

朕惟ルニ古昔郡縣ノ制全國ノ丁壯ヲ募リ軍國  
ヲ設ケ以テ國家ヲ保護ス固ヨリ兵農ノ分ナシ  
中世以降兵權武門ニ歸シ兵農始テ分レ遂ニ封  
建ノ治ヲ成ス戊辰ノ一新ハ實ニ十有餘年來ノ  
一大變革ナリ此際ニ當リ海陸兵制モ亦時ニ從  
ヒ宜ヲ制セサルヘカラス今本邦古昔ノ制ニ基

キ海外各國ノ式ヲ斟酌シ全國募兵ノ法ヲ設ケ  
國家保護ノ基ヲ立ント欲ス汝百官有司厚ク朕  
カ意ヲ體シ普ク之ヲ全國ニ告諭セヨ  
明治五年壬申十一月廿八日

徵兵告諭

我

朝上古ノ制海内舉テ兵ナラサルハナシ有事  
ノ日

天子之カ元帥トナリ丁壯兵役ニ堪ユル者ヲ  
募リ以テ不服ヲ征ス役ヲ解キ家ニ歸レハ農  
タリエタリ又商賈タリ固ヨリ後世ノ雙刀ヲ  
帶ヒ武士ト稱シ抗顏坐食シ甚シキニ至テハ  
人ヲ殺シ官其罪ヲ問ハサル者ノ如キニ非ス  
抑  
神武天皇珍彦ヲ以テ葛城ノ國造トナセシヨ  
リ爾後軍團ヲ設ケ衛士防人ノ制ヲ定メ神龜  
天平ノ際ニ至リ六府二鎮ノ設ケ始テ備ル保

元平治以後朝綱頹弛兵權終ニ武門ノ手ニ墜  
チ國ハ封建ノ勢ヲ為シ人ハ兵農ノ別ヲ為ス  
降テ後世ニ至リ名分全ク泯没シ其弊勝テ言  
ノ可カラス然ルニ大政維新列藩版圖ヲ奉還  
シ辛未ノ歳ニ及ヒ遠ク郡縣ノ古ニ復ス世襲  
坐食ノ士ハ其祿ヲ減シ刀劔ヲ脱スルヲ許シ  
四民漸ク自由ノ權ヲ得セシメントス是レ上  
下ヲ平均シ人權ヲ齊一ニスル道ニシテ則チ  
兵農ヲ合一ニスル基ナリ是ニ於テ士ハ従前

ノ士ニ非ス民ハ従前ノ民ニアラス均シク  
皇國一般ノ民ニシテ國ニ報スルノ道モ固ヨ  
リ其別ナカルヘシ凡ソ天地ノ間一事一物ト  
シテ稅アラサルハナシ以テ國用ニ充ツ然ラ  
ハ則チ人タルモノ固ヨリ心カヲ盡シ國ニ報  
セサルヘカラス西人之ヲ稱シテ血稅ト云フ  
其生血ヲ以テ國ニ報スルノ謂ナリ且ツ國家  
ニ災害アレハ人々其災害ノ一分ヲ受サルヲ  
得ス是故ニ人々心カヲ盡シ國家ノ災害ヲ防

クハ則チ自己ノ災害ヲ防クノ基タルヲ知ル  
ヘシ苟モ國アレハ則チ兵備アリ兵備アレハ  
則チ人々其役ニ就カサルヲ得ス是ニ由テ之  
ヲ觀レハ民兵ノ法タル固ヨリ天然ノ理ニシ  
テ偶然作意ノ法ニ非ス然而シテ其制ノ如キ  
ハ古今ヲ斟酌シ時ト宜ヲ制セサルヘカラス  
西洋諸國數百年來研究實踐以テ兵制ヲ定ム  
故ヲ以テ其法極メテ精密ナリ然レトモ政體  
地理ノ異ナル悉ク之ヲ用フ可カラス故ニ今

其長スル所ヲ取り古昔ノ軍制ヲ補ヒ海陸二  
軍ヲ備ヘ全國四民男兒二十歳ニ至ル者ハ盡  
ク兵籍ニ編入シ以テ緩急ノ用ニ備フヘシ郷  
長里正厚ク此御趣意ヲ奉シ徵兵令ニ依リ民  
庶ヲ説諭シ國家保護ノ大本ヲ知ラシムヘキ  
モノ也  
○詔勅并告諭共去壬申十一月廿八日  
第三百七十九号ニ係ル

徵兵令

緒言

兵ヲ徵スルノ方法ハ國家ノ大典忽ニスヘカ

ラサル者ニシテ又之ヲ實踐ニ行フノ難キ固ヨリ言ヲ俟タス其法タル古今其制ヲ異ニシ各國其趣ヲ同フセスト雖凡要スルニ一ニ民兵ニ因ラサル者ナシ所謂民兵ニ二種アリ曰壯兵曰賦兵是ナリ賦兵ナル者ハ全國ノ丁壯ヲシテ兵役ヲ帶ハシメ陸軍ノ兵員ヲ充タシ其内沿海ノ住民舟楫波濤ニ慣レシ者ヲ以テ海軍ノ兵員ニ充ツ而シテ壯兵ハ自ラ兵役ヲ望ミ出シ者ニシテ服役數年ヲ帶ヒ普ク武技

ニ熟練シ一團精兵トナリ頗ル其便益ヲ得ル然レ後日ニ至リ或ハ弊害ヲ生スル無キ能ハス是故ニ壯兵ノ法ヲ廢シ賦兵一般ノ制度ヲ建ント欲ス竊ニ各國賦兵ノ制ヲ考フルニ大率服役八年乃至二十年ヲ以テ程度トス今國朝實ニ始テ賦兵ノ大典ヲ起サントスルニ方リ兵役ノ久シキ恐ラクハ人民生活ノ業ヲ妨害シ且ツ當今ノ國力ニ於テモ關係無シト謂フヘカラス爰ニ於テ斟酌其宜ヲ採リ折衷



其要ヲ拔キ現今實際ニ行フノ法ヲ定メ題シテ徵兵令ト云

徵兵編成并概則

徵兵ハ國民ノ年甫メテ二十歳ニ至ル者ヲ徵シ以テ海陸兩軍ニ充タシムル者ナリ今爰ニ陸軍ヲ大別シテ三種トナス其一常備軍其二後備軍其三國民軍是ナリ又其兵丁ノ身材ニ從ヒ五派ノ兵種ニ區別ス曰砲兵曰騎兵曰歩兵曰工兵曰輜重兵而シテ各種ノ兵皆各管鎮

臺ノ國郡ヨリ召集シ若干年ノ役ヲ帶ハシメ所管鎮臺ニ備ヘ以テ地方ノ守衛ニ充ツ

其一

常備軍ハ本年徵兵ノ抽籤セシ者ヲ以テ編成シ三ヶ年ノ役ヲ帶ハシムル者ナリ

第一條

在營中定額ノ日給ヲ與ヘ其他服類共官費タルヘシ

第二條

強壯ニシテ技藝ニ熟シ行狀正シキ者ハ拔擢シテ近衛兵ニ充ツ

但近衛兵規則別ニ記ス

第三條

士官ノ望アル者ハ願ニ從テ檢査ノ上管下教導隊ニ入レ學業進歩ノ上ハ上下士官ニ任ス

第四條

技藝ニ熟シ才氣アル者ハ人撰ヲ以テ其隊ノ下士官ニ任ス

第五條

下士官ニ任セラレタル者ハ更ニ七個年以上ノ役ヲ帶ハシメ後備兵籍ヲ除ス最其人材ニ從

第六條

テ後備軍ノ上下士官ニ任ス兵卒ハ總テ三介年ノ服役ヲ有スト雖モ太平閑暇ノ時ハ服役二介年以上ニシテ技藝熟練スル者ハ詮議ノ上歸休ヲ許ス

歸休證書并規則

年號	何府縣何郡所住居何族或職業
徵兵	親名何男或兄叔伯名弟甥又厄介
常備第何番	何
入營第何番	某

右入營以來操練ニ勉勵シ其他勤方宜敷候ニ付向キ何个月ノ間休暇申付候最非常ノ節ハ布令次第早々歸營可致事

年号月日

第何軍管

何 鎮 臺

第一則

銃器服類屬具共保存ノ手當ヲナシ姓名番號ヲ記シ一ツ書ニシテ給養士官ニ引渡シ置クヘシ

第二則

歸休中ト雖モ在營ノ心得ヲ以

テ他出スルモ其管内ヲ出ルヲ禁ス

第三則

歸休中萬一病氣ニテ期限通り歸營相成リ難キ者ハ醫師ノ證書及ヒ府縣ノ証印ヲ以テ届出ヘシ若又父母ノ重病并ニ死没等止ムヲ得サル事故出来ノ者ハ醫師ノ證書并ニ其事故ニ係ル親族及ヒ府縣ノ証印ヲ以

テ願出ル者ハ詮議ノ上日數ヲ  
定メ之ヲ許ス

其二

後備軍ハ常備軍三ヶ年ノ役ヲ勤メ終リシ者  
ヲ以テ編成シ常ニ家居シ産業ヲ營マシム復  
之ヲ別チテ二種トナス曰第一後備軍曰第二  
後備軍是ナリ

第一後備軍ハ二ヶ年ノ役ヲ帶ハシメ戰時ニ  
當リテハ直チニ召集シ常備軍ニ加ヘ其員ヲ

充具セシム可キヲ以テ一歳ニ一度屯營ニ召  
集シ其技ヲ復習セシムル者ナリ

第一條 屯營中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ其

他服類共官費タルヘシ

第二條 技藝ニ熟シ才氣アル者ハ服役

中同軍ノ下士官ニ任ス

第三條 復習ヲ終ヘ歸郷ノ節ハ銃器服

類屬具共保存ノ手當ヲナシ姓  
名番號ヲ記シ一ツ書ニシテ給

養士官ニ引渡シ置クヘシ

第四條

服役中他出スルモ管内ヲ出ル

ヲ禁ス若シ止ムヲ得サル事故

アル時ハ其鎮臺ニ願出免許ヲ

請フヘシ最復習期限ニ妨碍ス

ヘカラス

第二後備軍ハ第一後備軍二個年ノ役ヲ勤メ

終リシ者ヲ以テ編成シ尚二個年ノ役ヲ帶ハ

シメ全國大舉ノ時ニ當リ召集スヘキ兵タル

ヲ以テ平時屯營召集ヲ要セサル者ナリ

但シ服役中自己ノ管内ヲ出ル時ハ出入并

ニ其往ク先キ共詳細ニ其鎮臺ヘ届出ヘシ

最第一後備軍非常屯集ノ節ハ早々管内ヘ

歸ルヘシ

總テ徵兵ノ服役期限ニ満ル者ト雖モ戰時ハ

勿論非常ノ事故アル時ハ其期ヲ延サ、ルヲ

得ス

其三

國民軍ハ常備後備兩軍ノ外ニ全國ノ男兒十  
七歳ヨリ四十歳迄ノ者悉ク兵籍ニ載セ置キ  
全國大舉ノ役アルニ方リ均シク隊伍ニ編入  
シ以テ管内ノ守衛ニ供スル者ナリ

第一章 徵兵官負并職掌

第一條 徵兵使

陸軍中佐或ハ少佐ノ内一人之ニ任シ府  
縣ニ出張シ知事令參事ト議シ徵兵ノ諸  
務ヲ總管ス

但時宜ニ依リテハ副使ヲ遣ハシ代理  
セシム

第二條 徵兵副使

陸軍大中少尉ヲ以テ之ニ任ス人負ハ巡  
廻府縣ノ大小ニ應シ正使ヲ佐ケ議官及  
ヒ一等軍醫副以下ノ醫官ト共ニ郡邑ヲ  
巡行シ徵兵規則内ノ事件ヲ決議シ抽籤  
等ノ事ヲ掌ル

第三條 書記

陸軍中少録ヲ以テ之ニ任ス人員ハ二人  
乃至三人トス徴兵使ノ諸記録ヲ掌ル

第四條 議長

府縣ノ知事令參事ノ内一人之ニ任ス徴  
兵ノ事ニ付審斷判決ノ事ヲ掌ル

第五條 議官

典事属ノ内ヲ以テ之ニ任ス人員ハ徴兵  
副使ノ數ニ准ス徴兵副使ト共ニ郡邑ヲ  
巡行シ職掌議長ニ亞ク

第六條 議員

戸長或ハ副戸長ヲ以テ之ニ任ス人員ハ  
大抵其検査スル所ノ區數ニ倍ス最時宜  
ニ由テ増減シ公文ヲ布達シ民情ヲ上伸  
スル事ヲ掌ル

第七條 二等軍醫一人

徴兵使ニ從ヒ兵丁ノ身材骨格兵役ニ適  
スルヤ否ヲ検査スル事ヲ掌ル

第八條 一等軍醫副ヨリ試補ニ至ル

徵兵副使ニ從ヒ郡邑ヲ巡廻ス職掌二等軍醫ニ同シ人員ハ徵兵副使ノ數ニ准ス

第九條 備醫

府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人員ハ其檢査スル所ノ區數ニ准シ軍醫ニ從ヒ地質ニ生スル所ノ疾病ヲ上告シ兼テ史生ヲ助ケ檢査ノ事件ヲ記録ス

第十條 史生

府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人員適宜ニ任

スト雖モ大抵議員ノ數ニ准シ檢査抽籤中ノ件々ヲ記録スル事ヲ掌ル

第十一條 徵兵使并ニ議長二等軍醫ハ各府

縣ニ滞在シ徵兵ニ關スル諸務ヲ總裁ス書記之ニ屬ス副使議官一等軍醫副以下備醫共組ヲ立テ各區ニ分行スル者トス

第十二條 徵兵諸官ハ一歲ノ徵兵事務ヲ竣

レハ悉ク職ヲ解ク者トス

第二章 徵兵使巡行并檢査前事務



第一條 徵兵使巡行ハ二月十五日ヨリ始メ  
第一章中第一條第二條ニ揭示シタル陸  
軍武官并ニ軍醫等一行トナリ府縣ニ出  
張シ地方ノ諸官ト合議シ徵兵署ヲ設ケ  
常備ノ定員ヲ充タスヲヨリ後備軍ノ出  
入免役願出ノ者等總テ徵兵ニ關スル事  
務ヲ裁判ス其出務ノ時間ハ大抵本省ニ  
准スト雖モ速ニ事務ヲ竣ルヲ要スルヲ  
以テ時刻ヲ變易スルハ時宜ニ由ルヘシ

第二條 代人料上納兵役免除ヲ願出シ者ハ

第六章中ノ第十五條第十六條ニ揭示シ  
タル書面ヲ以テ篤ト取糺シ聞届ノ上連  
名簿中本人姓名ノ上ニ徵兵署免役ノ檢  
印ヲ押スヘシ

第三條 府縣ヨリ陸軍省ヘ差出シタル徵兵

連名簿ヲ照シ當府縣ニ於テ當年徵兵幾  
人其内兵種相當ノ人員及ヒ補充ノ員數  
ヲ算定シ又免役連名簿并ニ箇條書取糺

新編陸軍令  
第四

新編陸軍令  
第四

シ中ニ就テ學徒ハ學校ノ証書及ヒ科目  
 免許書等點檢ノ上紛レナキ者ハ姓名ノ  
 上ニ徵兵署免役ノ檢印ヲ押スヘシ  
 第四條 徵兵ニ採ルヘキ者ハ皆軍人ヲ以テ  
 處置ス故ニ免役規則ニ適スル者ヲ除ク  
 ノ外如何ナル苦情之レアルトモ決シテ  
 間届クヘカラス最戸長ヨリ故障詳細書  
 ヲ以テ申立ル者ハ此限ニアラス  
 第三章 常備兵免役概則

第一條 身ノ丈々五尺一寸尺曲未滿者

第二條 羸弱ニシテ宿病及ヒ不具等ニテ兵  
 役ニ堪サル者

第三條 官省府縣ニ奉職ノ者  
 但等外モ此例ニ准ス

第四條 海陸軍ノ生徒トナリ兵學寮ニ在ル  
 者

第五條 文部工部開拓其他ノ公塾ニ學ヒタ  
 ル專門生徒及ヒ洋行修業ノ者并ニ醫術

馬醫術ヲ學フ者

但教官ノ証書并ニ何等科目ノ免許書  
アル者科目ノ等未定

第六條 一家ノ主人タル者

第七條 嗣子并ニ承祖ノ孫

第八條 獨子獨孫

第九條 罪科アル者

但除族并懲役實決一年以上ノ刑  
ヲ蒙リタル者

十二月廿四日  
百三ノヲ以テ  
但書改正

第十條 父兄存在スレ共病氣若クハ事故ア

リテ父兄ニ代リ家ヲ治ル者

第十一條 養子

但約束ノミニテ未夕實家ニア  
ル者ハ此例ニアラス

第十二條 徵兵在役中ノ兄弟タル者

第四章 徵兵検査

第一條 徵兵検査定日ハ三日以前ニ徵兵署

ヨリ郡々各區ハ布達シ區括リ日割リヲ

以テ一日戮人ト定メ戸長副戸長ノ内順序ニ召連出ヘシ

第二條 徵兵使巡行ノ時節ニ至レハ府縣廳ヨリ各區ニ左式雛形ノ如ク罫紙ヲ渡シ本年徵兵タル者ニ一枚宛渡シ朱書ニテ示シタル如ク姓名産國住居親ノ名或ハ兄叔伯總テ育ニシ者ノ名本年月日誕生年号月日其他罫紙ノ題号ノ下ニ父母ノ存亡ハ勿論同居ノ祖父母兄弟妻子及ヒ

氏神宗門等書載セ人別表ト稱ヘ検査ノ時各個持參シ軍醫ニ渡スヘシ  
區々ニ渡シタル罫紙ノ残りハ徵兵事務竣ルノ後府縣廳ヘ返納スヘシ  
人別表

何郡所産 何郡所住		何府縣何族或職業	
兵 徵		年号月日	
族	職 業	名	生 誕
名	名	名	年 号
名	名	名	月 日
名	名	名	何
名	名	名	某
名	名	名	親名何男或兄叔伯名弟甥又厄介
名	名	名	氏

妻子	兄弟		祖		親	
	女	男	女	男	女	男
宗門			神			

但産國ト當時ノ貫屬府縣ト異ナル者  
 ハ表首何郡所産ト書スルノ上ニ其産  
 國ノ府縣ヲ加ヘ若又寄留スル所ニ於  
 テ服役スル者ハ何郡所住ト書スルノ  
 替リニ其寄留スル府縣及ヒ何郡所寄

留ト書スヘシ

第三條 徴兵ノ体質ヲ検査スル時ハ徴兵副  
 使議官各一名列坐検査ノ件々ハ總テ軍  
 醫ノ專任タルヘシ

第四條 徴兵検査ノ席ニ出ル時ハ各個人別  
 表ヲ所持シ醫官ニ渡ス醫官ハ書記ヲ掌  
 トル者ニ渡シ姓名ヲ検査簿ニ留メシメ  
 身體骨格検査ノ件々ヲ記セシム

第五條 検査呼出シノ時ニ病氣ニテ出席成

リ難キ者ハ其家ニ就キ診断ノ上一時或  
ハ固著等ノ病質ヲ糺シ一時病氣ノ者ハ  
翌年ノ徵兵ニ廻シ固著ノ者ハ免役規則  
宿病ノ者同斷タルヘシ

第六條

檢査呼出シノ時ニ父母ノ喪ニ罹リ  
未夕三週間ヲ過キサル者或ハ父母ノ重  
病及ヒ一家ノ安危ニ係リ一時止ムヲ得  
サル事故出來ノ者ハ夫々詳細書及ヒ戸  
長ノ証印ヲ以テ願出ル者ハ翌年ノ徵兵

ニ廻スヘシ

但翌年ニ廻スヘキ徵兵ハ府縣毎ニ別  
簿ニ認メ徵兵署ノ檢印ヲ押シ府縣廳  
ヘ留置キ當冬ノ徵兵連名簿ト共ニ陸  
軍省ヘ差出スヘシ

第七條

徵兵署ニ隔リタル郡邑ハ副使一等  
副以下ノ軍醫議官及ヒ史生一行トナリ  
郡邑高ニ應シ分界ヲ立テ組ヲ分チ巡廻  
セシメ相應ノ場所ニ於テ假ニ檢査場ヲ

不令其爲之也

設ケ其式本署ニ異ナルヲナシ

第五章 抽籤并算筆試驗

第一條 身體檢査終リタル後檢査簿ヲ案シ

兵役ニ適スヘキ者ヲ點檢シ府縣毎ニ常

備抽籤召集ノ爲メ其定日及ヒ場所共三

日以前ニ布達スヘシ

第二條 抽籤ノ場所ハ府縣下或ハ管内便宜

ノ地ヲ以テス

第三條 抽籤ヲ五種ニ分チ其身材ニ從ヒ步

騎砲工輜ノ籤ヲ抽カシム

第四條 本年常備ノ缺員ヲ補フ爲メ補充兵

トシテ一介年ヲ期トシ常備一介年ノ徵

員二分ノ一以内ノ員數ヲ常備籤ト同時

ニ抽カシム

第五條 抽籤ノ法ハ籤丁ヲ調ハ左式雛形ノ

如ク籤札ニ其員數丈ケノ番号ヲ記シ籤

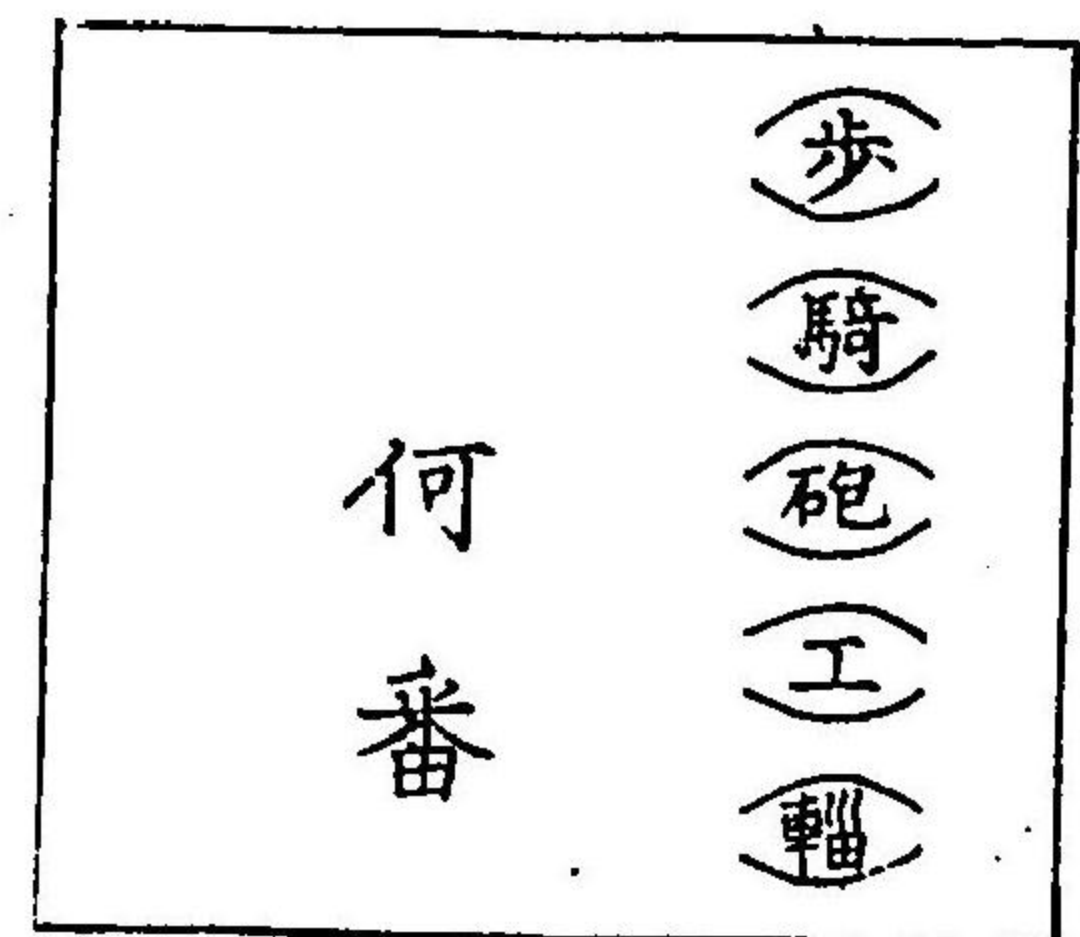
箱ニ納レ籤簿方ノ側ニ置キ區分ケ或ハ

郡分ケニシテ混雜セサル様一人宛之ヲ

抽籤并算筆試驗

抽カシメ籤簿方ハ始終籤簿ニ對シ抽籤ノ正不正ヲ檢シ抽キ舉レハ其番号ヲ自ラ高聲ニ唱ヘシメ籤札ヲ受取り籤簿ニ姓名番号ヲ記シ復當人ニ返ス  
假令ハ籤丁五百人ナルハ第一番ヨリ五百番迄ノ札ヲ納レ之ヲ抽カシム本年常備定員二百人補充百人ナルハ二百番迄ノ籤ヲ抽キシ者ヲ常備トナシ二百一番ヨリ三百番迄ノ籤ヲ抽

キシ者ヲ補充トシ其餘ヲ以テ落籤トス



何番

籤札ハ厚紙縦横三ツ或ハ四ツ切ニシテ四ツ折ニナシ中分ヲ捻ル

第六條 抽籤當日病氣ノ者ハ其親或ハ親族時トシテハ戸長ヲ以テ代人トス  
第七條 籤丁ニ當府縣ニ於テ常備幾人補充



幾人及ヒ籤丁ノ總員幾人ト抽籤以前ニ  
申聞セ置クヘシ

第八條 抽籤終リ常備及ヒ補充ニ當リタル  
者ハ書翰往復算術等出来得ルヤ否ヤヲ  
試ムヘシ

第九條 書翰并ニ算術ノ試験ハ史生ノ内算  
術ヲ心得居ル者ヲ撰任シ試験場ヲ設ケ  
上下二等ニ區別ス其仕法ハ二三行ノ翰  
牘ヲ讀ミ易キ様三四枚認メ并ニ十露盤

等備ヘ置キ一人宛算筆ノ内出来得ルヤ  
否ヤヲ問ヒ出来得ル者ニハ右翰牘ヲ讀  
マシメ無滞讀ニ得ル者ヲ上等トシ二字  
以上誤ル者ヲ下等トス算ノ除法(即ハ算  
見一)以上出来得ル者ヲ上等トナシ其以  
下ヲ下等トナス

第十條 試験全ク終ルノ後籤簿ヲ照シ人別  
表ト引合セ姓名住居其他左式雛形ノ如  
ク厚紙長廿五寸幅三寸ノ罫紙ニ陸軍徴

兵署ト題シタル割符ニ書載セ籤簿ニ引合セ割印ヲナシ番号并ニ服役年期ヲ書加ヘ籤簿順ニ呼出シ籤札ヲ出サシメ相違ナキ者ヘハ籤札ト右番号割符ト引替ヘ相渡シ第六章ノ第一條ニ揭示シタル如ク各個入營致スヘシ

番號割符

割印年

何府縣何郡所住居何族或職業

親名何男或兄叔伯名弟甥又厄介

日	月	號	陸軍
署	徵兵	各種	隊號
右何鎮臺常備軍三ヶ年服役申付候事		何某	

補充籤ヲ抽キシ者ハ 右何鎮臺補充兵一个年服役申付候事

第一後備軍ニ入ル者ハ 右何鎮臺第一

後備軍二個年服役申付候事

第二後備軍ニ入ル者ハ 右何鎮臺第二  
後備軍二個年服役申付候事

第十一條 補充役ヲ命セラレタル者ハ其家

ニ歸居シ落籤ノ者ト異ナルヲナシ常備  
缺員ノ節ハ其鎮臺ヨリ籤順ニ布達シ何  
時ニテモ入營ナサシムヘキニ付服役中  
ハ自分ノ管内ヲ出ルヲ禁ス

但服役ヲ命セラレタル其日ヨリ一个

年目ノ其日迄ニ常備入營ヲ命セラレ  
サル者ハ其役除籍ト心得ヘシ

第十二條 補充ヨリ常備軍ニ命セラレタル  
者ハ矢張り補充抽籤其日ヨリ三箇年ノ  
期ヲ保ツヘシ

第十三條 本年常備軍満期ノ者ハ出營ノ日  
後備籤ヲ抽カシメ以テ番號ノ順序ヲ定  
ム而シテ常備役ノ番號割符ニ満期ノ檢  
印ヲ押シ後備軍ノ番號割符ヲ相渡スヘ

シ

但當日病氣ノ者ハ其戰友ヲシテ之ヲ  
抽カシム

第十四條 本年第一後備軍満期ノ者ハ第二  
後備軍ノ籍ニ入ルヘキヲ以テ第二回屯  
營復習ノ節第一後備役ノ番號割符ニ満  
期ノ檢印ヲ押シ第二後備軍ノ番號割符  
ヲ相渡スヘシ

但シ病氣ニテ不參ノ者ハ戰友ニ之ヲ

渡ス

第十五條 第二後備軍ノ番號割符ヲ受ケ二  
今年目ノ其日ヨリ第二後備軍ノ籍ヲ除  
セラレシ者ト心得ヘシ

第十六條 本年各府縣ニ於テ徵兵事件全ク  
竣ルノ後徵スル所ノ兵員ヲ精算シ兵種  
ヲ分チ左式雛形ノ如ク罫紙ニ各個持參  
致シタル徵兵人別表ヲ寫シ取り身體檢  
査簿算筆試驗簿及ヒ籤番號ヨリ顔額其

他題號ノ下ニ悉ク書載セ人別明細連名籍ヲ認メ常備補充ヲ區別シ一府縣ニ纏メ各二部ヲ作り陸軍省及ヒ所管ノ鎮臺ヘ差出スヘシ

但鎮臺ヘ渡ス人別明細連名籍ニ籤簿相添ヘ四月十五日迄ニ差廻スヘシ

職業 本人	族 親	誕 生	住 所	産 國	親或元叔伯名 本人姓名
					何某
					同
					同
					同

顔	兵卒明細連名籍	番號		検査		妻 子	兄弟		祖		親		宗 門	氏 神
		入 營	常 備	尺 度 体 質	筭 筆		女	男	女	男	女	男		
長短方圆大小扁平 廣潤等字	陸軍省													

師務類編卷之四

別徵	痘	眉	髮	顙	口	鼻	眼	額
	天然種	濃淡疎密長短細 大等字	濃淡疎密茶褐卷 縮等字	長短尖圓張彎曲 等字	大小上下唇厚薄 露齒等字	隆卑大小及尖彎曲 鼻孔朝天大小等字	大小銳鈍凹陷凸起 舉垂細圓等字	長短廣狹扁凸等 字

第十七條 本年徵兵出席ノ名簿ヨリ代人料  
上納名簿免役名簿其他種々ノ願書及ヒ

届書區長戸長ノ取調ヘ証書總テ徵兵ニ  
關スル書類ハ一切人別明細連名籍ト共  
ニ陸軍省ヘ差出スヘシ

第六章 徵兵雜則并扱方

第一條 常備籤ヲ抽キタル徵兵ハ四月廿日  
ヨリ五月一日迄ニ入營致スヘシ其營所  
迄ハ府縣毎ニ區括リニシテ戸長副戸長  
ノ内召連レ出ヘシ最營所ニテハ籤ノ番  
號ヲ目的ニ入營ナサシムヘキニ付齟齬

ナキ者ハ銘々勝手ニ入營致スヘシ夫迄ノ入費ハ總テ府縣ニテ辨スヘシ若シ事故アリ入營遲緩ニ及フハ其事故ヲ生スル所ヨリ辨スヘシ

但書中區括リト稱スル者ハ區ノ大小人口ノ疎密ニ由リ二區或ハ三四區括リ總テ府縣ノ便利ニ從フ

第二條 籤ノ番號ハ服役中ノ目的タルヘキヲ以テ各個丁寧ニ所持致スヘシ

第三條 病氣或ハ事故出來期限通り入營相

成リ難キ者ハ其段詳細ニ書認メ區長及ヒ其病氣事故ニ係リタル者ノ証印ヲ以テ至急ニ其鎮臺ヘ届出ヘシ

第四條 常備軍服役在營中其身元轉居スル

片ハ其隊ノ軍曹ヘ届出ヘシ歸休中ノ者ハ第九條第一後備服役中轉居ノ届同斷タルヘシ最其隊ノ軍曹ヘモ同様届出ツヘシ

第五條 常備軍服役中歸休郷里ニ在テ死没  
スル者ハ其親或ハ兄叔伯ニテモ育ミシ  
者ヨリ當人營所ノ士官及ヒ其鎮臺ヘ届  
出ヘシ

第六條 常備軍在營中病氣ノ者ハ軍醫ノ診  
斷ヲ以テ病院ニ入レ治療セシメ其上ニ  
テ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ兵籍ヲ除スヘシ  
最歸縣迄ノ旅費ハ定則ニ照準シ賜ルヘ  
シ

第七條 父母ノ重病或ハ非常ノ事故出来一  
時止ヲ得サル歸省ヲ願フ者ハ其親或ハ  
親族ノ者ヨリ府縣廳ノ與書証印ヲ以テ  
所管ノ鎮臺ヘ願出ルニ於テハ詮議ヲ遂  
ケ許可スヘシ最滯郷日數ハ往來ヲ除ク  
ノ外二周間ヨリ長カルヘカラス  
但旅費ハ往來共自辨タルヘシ

願書案文

何府縣何郡所住居何姓或職業

何 某



右私何男年何年ヨリ御臺常備軍入營

罷在候處父或ハ母何某病氣大切云

々ニ付或ハ何々ノ事故出来ニ付何

卒御規則ノ日數御暇被 仰付度奉

願上候以上

年号月日

何某印

何鎮臺

御中

前書之通相違無御座候以上

同日

何府縣印

第八條 第一後備軍ノ復習期限八年々十日

以前ニ其鎮臺ヨリ布達シ旅費等ハ陸軍

兵卒旅費定則ニ照準シ里程ニ應シ相渡

スヘシ若シ病氣或ハ事故出来ノ者ハ第

三條ノ通り届出ヘシ

第九條 後備軍服役中轉居スル片ハ受ケ送

リ雙方共戸長ノ姓名奥書証印ヲ以テ其

鎮臺へ届出ヘシ

但其管内ヲ出ルヲ禁ス

届書案文

私儀此度何郡所へ轉居仕候間此段

御届申上候以上

年号月日

年号第一後  
備軍第何番

何府縣何郡所住何様式職業

何某印

何鎮臺

御中

前書ノ通相違無御座候以上

同日

送り何郡所戸長

何某印

同日

受何郡所戸長

何某印

第十條 後備軍服役中ノ者若シ官省府縣ヨ

リ登庸セント欲スル片ハ其官廳ヨリ其

鎮臺へ掛合フヘシ

第十一條 後備軍服役中死没ハ親或ハ兄叔

伯ニテモ育ミシ者ヨリ届出ヘシ若シ又

後備軍服役中國禁ヲ犯シ或ハ脱走等ノ

者アル片ハ其府縣廳ヨリ箇條書ヲ以テ

陸軍省及ヒ所管ノ鎮臺へ届出ヘシ

第十二條 全國ノ男兒齡十七歳ヨリ國民軍籍ニ入り外寇或ハ有事ノ時ニ當リ隊伍ニ編入シ管内守衛トナルヘキヲ以テ前年十六歳ノ冬十一月十日迄ニ其親或ハ兄叔伯ニテモ育ミシ者ヨリ戸長ヘ左式ノ通り届出ヘシ最一家ノ主人タル者ハ自分ヨリ届出ヘシ戸長之ヲ取調ヘ十一月廿日迄ニ所轄ノ區ヘ差出シ區長點檢ノ上十一月三十日ヲ限リ區拈リニシテ

府縣廳ヘ差出シ翌年ノ成丁簿ニ載セ置クヘシ

男兒十六歳ニ滿レハ其年ノ冬十一月十日迄ニ各個戸長ヘ左式ノ書付ヲ以テ届出ヘキ様府縣廳ヨリ郡々村々ニ至ル迄洩レサル様布達致シ置クヘシ  
何男 某儀明年十七歳ニ相成候間  
何男 此段御届申上候以上

年号月日

何郡所住何族或職業  
 何某印

戸長

何某殿

戸長ハ十一月廿日迄ニ右届出ノ姓名  
ヲ一纏ニシテ左ノ通り區長へ届出へ  
シ  
當何郡ニ於テ明年十七歳ニ相成  
候者別冊ノ通幾名御座候此段御  
届申上候也

年号月日

何郡所戸長

何某印

第何大區

御中

區長ハ十一月三十日迄ニ戸長ヨリノ  
届書ヲ一纏ニシテ左ノ通り府縣ノ戸  
籍掛へ届出へシ  
當区内ニ於テ明年十七歳ニ相成  
候者別冊ノ通り戸長ヨリ届出候  
間及進達候也

年号月日

何郡所第何大區長

何某印

何府縣戶籍掛

御中

第十三條 男兒二十歳ニ至レハ兵役ニ就ク  
 ヘキヲ以テ毎年十二月廿五日迄ニ府縣  
 廳ニ於テ十九歳ノ者ヲ調ヘ徵兵連名簿  
 ニ載スルトス是故ニ十九歳ノ者ハ其  
 年ノ十一月十日迄ニ前條十七歳ノ届式  
 ノ如ク戸長へ届出テ戸長十一月廿日迄  
 ニ成丁簿ヲ照シ現人ニ引合セ其内免役

ニ適スル者ハ篤ト取調ヘ夫々箇條書相  
 添ヘ區長へ差出シ區長八十一月三十日  
 迄ニ區括リニシテ証印シ府縣廳へ差出  
 スヘシ府縣廳之ヲ點檢シ徵兵連名簿ニ  
 載セ十二月廿五日迄ニ陸軍省へ差出ス  
 ヘシ最免役ニ適スル者ハ區々ヨリ差出  
 シタル免役箇條書ヲ取糺シ免役連名簿  
 ヲ認メ各個箇條ヲ詳細ニ書載セ徵兵連  
 名簿ト共ニ差出スヘシ其中官負ハ其勤

仕スル官廳ノ名及ヒ等級學徒ハ夫々其  
修業スル處ノ學校ヘ掛合セ教官ノ証書  
及ヒ科目免許書等取寄セ置キ徵兵使巡  
行ノ日差出スヘシ若シ右証書科目書等  
之ナキ者ハ正月中ニ呼返シ置クヘシ最  
洋行修業ノ者ハ此例ニアラス

戸長届書案文

當何郡 何村ニ於テ當年十九歳ニ相成  
リ候者別冊ノ通り幾名其内免役

御規則ニ當リ候者幾名御座候ニ  
付夫々箇條書相添ヘ此段御届申  
上候以上

年号月日

何郡所戸長 何某印

第何大區

御中

區長進達書案文

當區内ニ於テ當年十九歳ニ相成  
候者別冊ノ通り幾名其内免役御

規則ニ當リ候者幾名夫々箇條書  
差添へ戸長ヨリ届出候間篤ト取  
調へ候處相違無御座候間及進達  
候也

年号月日

何郡所奉何大區長

何某印

何府縣戸籍掛

御中

第十四條 寄留スル者ノ子弟及ヒ厄介タル  
者ハ現今寄留スル府縣ノ兵籍ニ入ルハ

但本籍ニ歸リ兵役ヲ勤メント欲スル  
者ハ十九歳十一月十日迄ニ此段ヲ戸  
長ニ届戸長ヨリノ送り書ヲ以テ本籍  
ニ歸ルヘシ

第十五條 本年徴兵ニ當リ自己ノ便宜ニ由  
リ代人料金二百七十圓上納願出ル者ハ  
常備後備兩軍共之ヲ免ス  
免役上納金ハ區長へ差出シ府縣廳ニ

不<sub>レ</sub><sub>レ</sub>才<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>也

纏メ五月中ニ陸軍省へ相納ムヘシ  
第十六條 免役ヲ願出ル者ハ其親或ハ親族  
ノ者ヨリ徵兵使巡行徵兵検査以前左ノ  
願書ヲ認メ戸長ノ與書証印ヲ以テ區長  
へ差出スヘシ

其親或ハ親族ノ者願書并戸  
長與書素文

私<sup>何男</sup><sub>親族</sub>何某儀當年二十歳ニ相成服  
役可仕答ノ處家事差支リ有之ニ

付代人料金二百七十圓上納仕候  
間何卒常備後備兩軍共御差除被  
下度奉願上候以上

年号月日  
何府縣何郡所住何族或職業  
何某印

陸軍徵兵署

御中

前書願出ノ通相違無御座候以上  
同日  
何郡所戸長  
何某印  
區長進達書素文

古<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>ノ<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>座<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>



當区内免役願出候者幾名戸長ヨ  
リ奥書証印ヲ以テ別冊ノ通り差  
出候間精細吟味仕候處毛頭不都  
合ノ筋無御座候間及進達候也

年号月日

何郡所第何大區長

何某印

陸軍徵兵署

御中

第十七條 總テ區長戸長ノ取扱フヘキ事件  
未夕區長戸長ヲ差置レサル所柄ヲハ區  
長戸長ニ相當スル從前ノ莊屋以上ノ者

ヲ以テ之ニ代フヘシ

第十八條 徵兵ニ關スル事件ニ付年齢及ヒ  
父母兄弟ノ有無又ハ虛病其他詐偽スル  
者ハ官ヲ欺罔スルノ罪若シ又戸長或ハ  
區長取調ヘ証印ノ上ハ其証印ヲナセシ  
官吏ハ粗漏ノ罪尚又徵兵ノ欺妄ヲ隱匿  
スル者ハ其罪最重カルヘシ右孰レモ新  
律綱領ニ照準シ其罪ヲ糾ス可キナリ

明治六年第一月

陸軍省

六管鎮臺徵員并式

第一軍管東京鎮臺常備

步兵 三聯隊

騎兵 二大隊

砲兵 四小隊

工兵 三小隊

輜重兵 一隊

海岸砲兵 三隊

人員七千百四十人

管下府縣

內一个年徵員二千三百八十人

東京 神奈川 埼玉

入間 足柄 静岡

山梨 印旛 木更津

新治 茨城 宇都宮

新潟 柏崎 群馬

枋木 長野 相川

府一縣十七  
高七百三十七万石

第二軍管仙臺鎮臺常備

步兵 二聯隊

騎兵 一大隊

砲兵 二小隊

工兵 一小隊

輜重兵 一隊

海岸砲兵 一隊

人員四千四百六十人

內一十年徵負一千四百八十六人

管下諸縣

宮城 磐前 福島

水澤 若松 青森

岩手 秋田 酒田

山形 置賜

縣十一  
高四百二十二万石

第三軍管名古屋鎮臺常備

步兵 二聯隊

砲兵 二小隊

工兵

一小隊

輜重兵

一小隊

人員四千二百六十人

內一个年徵員千四百二十人

管下諸縣

岐阜

額田

濱松

筑摩

愛知

石川

新川

足羽

縣八  
高四百八十二万石

第四軍管大阪鎮臺常備

步兵

三聯隊

砲兵

四小隊

工兵

二小隊

輜重兵

一小隊

海岸砲兵

二隊

人員六千七百人

內一个年徵員二千二百三十四人

管下府縣

大阪

兵庫

堺

和歌山

奈良

京都

滋賀

敦賀

三重

度會

飾磨

豐岡

鳥取

北條

岡山

府二縣十三  
高六百二十九万石

第五軍管廣島鎮臺常備

步兵

二聯隊

砲兵

二小隊

工兵

一小隊

輜重兵

一隊

海岸砲兵

一隊

人員四千三百四十人

内一个年徵員一千四百四十六人

管下諸縣

廣島

小田

島根

濱田

山口

香川

名東

高知

神山

石鐵  
縣十  
高四百〇四万石

第六軍管熊本鎮臺常備

步兵	二聯隊
砲兵	四小隊
工兵	二小隊
輜重兵	一隊
海岸砲兵	一隊
人員	四千七百八十人

管下諸縣

内一个年徵員一千五百九十四人

白川 八代 鹿兒島

都城 美々津 大分

小倉 福岡 三潁

佐賀 長崎

縣十一  
高四百四十八万石

人員三萬千六百八十人

總計  
内一个年徵員壹萬〇五百六十人

府三 縣七十

石高 三千百二十二萬石

以上六鎮ヲ以テ全國兵備ヲ管シ所屬ノ府縣ヨリ毎歲ノ定員ヲ徵募シ以テ管内ノ守衛ニ充ツ而シテ沿海ノ丁壯舟楫波濤ニ慣レタル者ヲ以テ海軍ノ兵員ヲ充ツシム蓋此書ハ陸軍ヲ限ル

全國徵兵表

歲次	每歲徵數	合數

初年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
一萬〇五百六十	一萬〇五百六十	一萬〇五百六十	一萬〇五百六十	一萬〇五百六十	一萬〇五百六十	一萬〇五百六十
兵	備三萬千六百八十	常	備後一第	備後二第	備後二第	備後二第
以テ之ヲ補フ	テ缺員アル毎ニ補充兵ヲ	此兵常ニ充足ヲ要スルヲ以	分ノ四トス	八千四百四十八	分ノ二トス	八千四百四十八
			一萬六千八百九十六	緩急ノ用ニ供ス可キ者五分ノ四トス	此兵ハ漸ク年月ヲ經ルヲ以テ緩急ノ用ニ供ス可キ者五分ノ二トス	此兵ハ漸ク年月ヲ經ルヲ以テ緩急ノ用ニ供ス可キ者五分ノ二トス

常備步兵ニ付各種兵員ノ比較  
步兵 二萬六千八百八十人

凡七十五分ノ一 騎兵即三百六十人

凡十二分ノ一 砲兵即二千百六十人

凡二十二分ノ一 工兵即千二百人

凡七十五分ノ一 輜重兵即三百六十人

凡三十七分ノ一 海軍砲兵即七百二十人

合計三萬千六百八十人

各種常備兵一个年ノ徵員

歩 八千九百六十人

騎 百二十人

砲 七百二十人

工 四百人

輜重 百二十人

海岸砲 二百四十人

合計壹萬〇五百六十人

補充兵トシテ常備一个年徵員五分ノ二中二  
就テ常備騎兵ハ之ヲ他種ノ兵員ニ比スレハ  
最少ニシテ近衛ニ撰擧スル最夥ヲ以テ倍數  
輜重兵是ニ蹤ヲ以テ五分ノ三合數四千三百



二十人トス之ヲ各管鎮臺各種ノ兵員ニ應シ  
常備同時ニ徵募シ一今年ヲ期トシ本年管内  
常備ノ缺員ヲ充タシム

但シ非常ノ缺員ヲ生シ本年補充ニテ充足  
セサル片ハ前年補充ヲ以テ之ヲ充タス  
補充一今年ノ徵員

歩	三千五百八十四人
騎	百二十人
砲	二百八十八人

工	百六十人
輜重	七十二人
海岸砲	九十六人
合計	四千三百二十人

常備補充一今年徵員ノ合數

歩	一万二千五百四十四人	内補充	三千五百八十四人
騎	二百四十人	同	百二十人
砲	千〇〇八人	同	二百八十八人
工	五百六十人	同	百六十人

輜重 百九十二人 內補充 七十二人

海岸砲 三百三十六人 同 九十六人

合計壹萬四千八百八十人

各種兵卒ノ定尺尺曲

砲兵 五尺四寸以上

海岸砲兵 五尺四寸以上

騎兵

工兵 五尺三寸五分以上

輜重兵

各種兵卒ノ定尺ニ照準シ步兵百人ニ付テ各種兵卒ノ比較

步兵 五尺一寸以上

騎 百人

砲 壹人、九一三

工 八人、〇三五

輜重 四人、四六四

海岸砲 壹人、五三〇

二人、六七八

海岸砲墩ハ目今山野砲ヲ以テ之ニ充ツ因テ  
其兵員ヲ除キ追漸海岸砲ヲ備付ル片ニ當リ  
各處其定員ヲ徴ス

明治六年第一月

陸軍省

近衛兵編成并兵額

近衛兵編成

近衛兵ハ常ニ輦下ヲ護衛シ他ノ徵發ニ應  
スル者ニ非ス偏ヘニ天子ノ命令ヲ奉戴シ  
千軍萬馬ノ中ト雖モ整々獨歩スルノ膽勇ヲ

持有シ又平常ニ在テハ信義ヲ本トシ先進ヲ  
敬マヒ後進ヲ教導シ總テ隊中ノ掟ヲ守リ全  
國諸兵ノ模範タル可キヲ以テ諸兵ノ上ニ位  
セシメ其給俸ヲ増加ス就中此兵ハ全國共戴  
ノ至尊ヲ護衛スルノ兵タルヲ以テ各鎮管  
内常備熟練兵ノ中強壯ニシテ行狀正シキ者  
ヲ一小隊毎ニ兵種ニ應シ若干人ヲ撰擧シタル  
者ヨリ編成シ奉命其日ヨリ更ニ五年ノ役ヲ  
帶ハシメ滿期ノ上ハ後備軍ノ籍ヲ免スル者也

近衛兵額

兵衛兵額表

平常其員ヲ充足セシムルヲ以テ缺員毎ニ各鎮常備軍ヨリ採擧シ其員ヲ充タシメ戰時ノ増加ヲ要セム

隊	數	每一隊人數	總員
步兵	二聯隊 <small>即四大隊</small>	八百	三千二百
騎兵	一大隊	百五十	百五十
砲兵	二小隊	百五十	三百
工兵	一小隊	百五十	百五十
輜重兵	一小隊	八十	八十
合計			三千八百八十

鎮臺兵ニ付近衛兵ノ比較

鎮臺 近衛

歩 二万六千八百八十人 凡八分ノ一即三千二百人

騎 三百六十人 凡二分ノ一即百五十人

砲 二千百六十人 凡七分ノ一即三百人

工 千二百人 凡八分ノ一即百五十人

輜 三百六十人 凡四分ノ一即八十人

合計三万〇九百六十人 合計三千八百八十人

近衛兵每年撰擧ノ兵員

歩 六百四十人

騎 三十人

砲 六十人  
 工 三十人  
 輜 十六人

合計七百七十六人

鎮臺各種ノ兵百人ニ付近衛兵撰舉ノ比較

鎮臺 近衛

歩 百人 二人、三八  
 騎 百人 八人、三三  
 砲 百人 二人、七七

工 百人 二人、五〇  
 輜 百人 四人、四四  
 明治六年第一月 陸軍省

六管鎮臺兵額表

戰時ノ増員ハ第一後備兵ヲ以テ之ニ充ツ

計	海岸砲	輜重兵	工兵	砲兵	騎兵	歩兵	隊數		戰時ノ増員ハ第一後備兵ヲ以テ之ニ充ツ	
							隊數	人員	平時	戰時
計	九	六	十八	十八	三	十四	六	六	九	十四
平時	八	六	百二十	百二十	百二十	六百四十	六	六	九	十四
戰時	十	八	百五十	百五十	百五十	九百六十	十	十	十五	二十
合計	十七	十四	二百七十	二百七十	二百七十	二千六百四十	十六	十六	二十四	三十四

國軍兵額并配分表

○鎮守兵ハ全國六管十四部ニ分置ス  
○近衛兵ハ常ニ京城ニ領在ス

附言	合計	砲岸海	兵重輜	兵工	兵砲	兵騎	兵步	鎮 臺		近 衛		諸 兵 總 計	
								隊數	人員	隊數	人員	隊數	人員
	平時	九	六	十	十八	三	十四	三	二	四	十六	四十六	三万〇〇八
	戰時	九	六	十	十八	三	十四	三	二	四	十六	四十六	三万〇〇八
	平時	九	六	十	十八	三	十四	三	二	四	十六	四十六	三万〇〇八
	戰時	九	六	十	十八	三	十四	三	二	四	十六	四十六	三万〇〇八

○戰時増加ノ人員ハ第一後備即前二年間放ツ所ノ兵ヲ以テス  
○近衛ハ平時其員ヲ充足セシムルヲ以テ戰時ノ増加ヲ要セス  
○輜重海岸砲ノ二兵ハ戰時ノ増加甚夥ヲ要スト雖モ第一後備ヲ以テ充足シ難キ分ハ之ヲ除ク且海岸砲ハ逐漸盛大ヲ要スト雖モ目今必用ノ一二ヲ示ス

第百十九號 三月廿九日

府 縣

徵兵使ノ儀ハ順次ヲ以テ各府縣へ發遣候筈  
ニ付期限人員ハ追テ陸軍省ヨリ可相達且徵  
兵署取設事務取扱向ハ都テ同省へ伺出差圖  
ヲ受可取計此旨相達候事  
陸軍省四百三十九號 三月廿日  
徵兵丁簿ノ儀ニ付去ル十八日相達候書面書  
損ノ廉有之ニ付取消更ニ別紙ノ通相達候事  
徵兵令卷首徵兵編成并概則中其三ト有之候







改訂鎮臺條例

標題

- 軍管師管部 第一條至第十條
- 要塞部 第十一條至第十四條
- 憲兵部 第十五條至第十七條
- 府縣官部 第十八條
- 市井裁判所部 第十九條
- 近衛部 第二十條至第二十四條
- 檢閱使部 第二十五條至第二十八條

司令將官本務部 第二十九條至第五十六條

鎮臺條例

第一條 凡ソ 皇國域内ニ駐劄スル各種ノ  
 兵隊ハ別テ七軍管トナシ各鎮臺ノ司令  
 將官ヲシテ之ヲ統率セシムル事左ノ如  
 シ

第一軍管ハ第一師管(營所東京)第二師管  
 (營所佐倉)第三師管(營所新潟)ヲ包括シ  
 東京鎮臺ニ統率ス

第二軍管ハ第四師管(營所仙臺)第五師管

(營所青森)ヲ包括シ仙臺鎮臺ニ統率ス

第三軍管ハ第六師管(營所名古屋)第七師

管(營所金澤)ヲ包括シ名古屋鎮臺ニ統

率ス

第四軍管ハ第八師管(營所大阪)第九師管

(營所大津)第十師管(營所姫路)ヲ包括シ

大阪鎮臺ニ統率ス

第五軍管ハ第十一師管(營所廣島)第十二

師管(營所丸龜)ヲ包括シ廣島鎮臺ニ統率ス

第六軍管ハ第十三師管(營所熊本)第十四

師管(營所小倉)ヲ包括シ熊本鎮臺ニ統

率ス

第二條 凡ソ六軍管ハ其管下ノ兵員戰時ニ

當リ畧一軍ヲ興スニ足ルヲ以テ軍管ト

名ツケ其師管ハ畧一師ヲ興スニ足ルヲ

以テ師管ト名ク

第三條 凡ソ師管ノ内又分テ數箇ノ營所ヲ

置ク左ノ如シ

東京師管々内 小田原 静岡 甲府

佐倉師管々内 木更津 水戸 宇都宮

新潟師管々内 高田 高崎

仙臺師管々内 福島 水澤 若松

青森師管々内 盛岡 秋田 山形

名古屋師管々内 豊橋 岐阜 松本

金澤師管々内 石川縣内 七尾 福井

大阪師管々内 兵庫 和歌山 西京

大津師管々内 敦賀 津

姫路師管々内 鳥取 岡山 豊岡

廣島師管々内 松江 濱田 山口

丸龜師管々内 徳島 高知縣内 須崎浦 宇和島

熊本師管々内 千歳 飲肥 鹿兒島 琉球

小倉師管々内 福岡 長崎 對馬

第四條 凡ソ營所ノ數四十師管ノ營所ト合  
シテ五十四トナシ各其區域ヲ畫シテ三

府六十三縣略相表裏シ以テ管内ノ靜謐ヲ保護セシム

第五條 其北海道ハ第七軍管トス其守備方法他ノ諸道ト異ナルヲ以テ茲ニ之ヲ舉ケス  
凡ソ六管鎮臺ニハ司令ノ將官一員ヲ置テ管内ノ軍務ヲ董督シ上  
天皇大燾ノ下ニ屬シ直チニ陸軍卿ニ隸ス

第六條 其臺下ニハ各步騎砲工輜重ノ常備諸軍隊ヲ置キ以テ不虞ヲ警メ緩急ニ應シ四出圓轉シテ方面ノ寇賊ニ禦ルノ備ヘヲナサシム

第七條 凡ソ師管ノ營所ニハ唯步兵一聯隊ヲ置キ以テ管内ヲ鎮壓シ方面ノ草賊ニ備ヘシム

第八條 其他營所ハ逐年兵員増加スルニ從ヒ之ヲ置クノ目的ニシテ現今若シ事情

之ヲ要スル時ハ師管ノ分遣隊ヲ分屯セシム

第九條 凡ソ六管ノ鎮臺ニ至重ノ將官ヲ置テ其管下ヲ統括セシムルハ各師管ノ一致同揆ニシテ多岐乖戾莫ラシメ以テ平時ニ在テハ彼此隔絶ズルノ兵隊ヲシテ畫一ノ令ヲ守ラシメ戰時ニ在テハ應援分合其宜シキヲ得セシムル所ナリ

第十條 凡ソ隸屬ノ法營所ハ師管ニ隸シ師

要塞部

管ハ軍管ニ隸スルヲ以テ平常ノ報告并ニ物品ノ度支ハ各其序ヲ逐フヲ正例トナスト雖モ地勢彼此懸絶スルヲ以テ尚此以下諸條ニ開示スル方法ニ從フヘシ

第十一條 凡ソ要塞ノ司令將校ハ砲兵方面ニ屬シ其司令ヲ歷テ陸軍卿ニ隸スルヲ正例トス然レモ現今要塞ノ設未夕備ラス其箇所タル多カラサルヲ以テ姑ク其軍管ノ司令將官ニ隸シ文移報告并ニ物

品度支ノ諸項皆鎮臺ト往復ス可シ但此  
例内別ニ揭示スル條ハ此例ニ非ラス

第十二條 凡ソ要塞ノ衛戍ガレニソシヲ要スル地ハ要

塞司令官ヨリ陸軍省ニ牒シ卿ノ許可ヲ  
得テ再ヒ鎮臺ノ司令將官ニ牒シテ取り  
充ルヲ許ス其每期ノ更番ノ法ノ如キハ  
全ク鎮臺司令將官ノ權内ニ在ル可ク但  
間歇アルヲ許サ、ルノ三

第十三條 其將校部下兵隊ヲ率テ已ノ所

轄ニ屬セサル城堡内若クハ城堡周圍ノ  
戰線内ニ劄駐スル者ハ其要塞司令官ノ  
請ヒニ應シ報知ヲナシ又要塞ノ服役警  
備ノ為メニハ哨兵ヲ置キ若クハ必要ナ  
ル分隊ヲ出スヘシ

第十四條 其哨兵若クハ分隊ハ要塞司令官  
ニ隸屬スルヲ以テ其要塞ノ周圍戰線内  
ニ於テ彼此ニ分駐スル士官下士兵卒ハ  
要塞ノ司令官監視ヲ加ヘ若シ犯法ノ者

憲兵部

アル時ハ速カニ傳駐ヲ命シ而シテ其隊ノ司令將校ニ報スヘシ

第十五條 凡ソ憲兵部ハ現今未タ之ヲ置カ

スト雖モ後來施設ニ及フ時ハ亦鎮臺ノ

司令將官ニ屬セス直チニ其司令ヲ歷テ

陸軍卿ニ隸スルヲ正例トス

第十六條 重大ノ事件起ル時ハ兩牒ヲ造リ

本牒ヲ以テ陸軍卿ニ報シ副牒ヲ以テ其

駐スル地ノ軍管ノ司令將官ニ進報スヘシ

第十七條 其軍管ノ司令將官ヨリ其地方ノ

憲兵部ノ將校ニ移牒シテ事情消息ヲ問

フ事アレハ憲兵部ノ將校仔細ヲ悉シテ

應酬ス可シ又火急ノ事變ニ遭テハ軍管

ノ司令將官ノ命ヲ奉シテ服事ス可シ

第十八條 凡ツ軍管ノ司令將官ハ其管内各

府縣ノ政令并ニ改革創設ノ事件ニ就テ

ハ知事令ヨリ報知ヲ受ルノ權ヲ有シ且

世上ノ靜謐ニ關涉スル事情アレハ詳細

府縣官

市井裁判所

近衛

開説ヲ受ルノ權ヲ有ス

第十九條 其司法所轄ノ府縣裁判所ヨリモ亦改革創設ノ事件并ニ風憲事務ノ世上ノ静謐ニ關涉スル項ハ詳細開説ヲ受ルノ權ヲ有ス

第二十條 凡ソ軍管内近衛ノ兵隊アル時一般ノ軍紀要塞ノ服役等其他世上ノ風紀ニ關涉スル事ニ就テハ鎮臺所管ノ兵隊ハ其助成ヲ受ルノ權ヲ有ス

第二十一條 凡ソ東京ヲ除クノ外近衛ノ諸兵隊軍管内ニ屯駐スル時操練ノ便宜ノ為ニ鎮臺ノ諸兵隊ト合シテ合一ノ大操練ヲ催サシムルヲ得ヘシ

第二十二條 其東京ニ在テハ或ハ陸軍卿ノ好ミニ由リ或ハ近衛都督軍管ノ司令將官トノ合議ノ後陸軍卿ノ許可ヲ得テ之ヲ施行スルヲアルヘシ

第二十三條 凡ソ近衛ノ兵隊ハ其長官ノ前



ニ在スシテハ觀兵ノ式ニ於テ整列行進  
セサルヲ正例トス然レモ近衛ノ一兵隊  
東京ノ外他方ノ衛戍ニ到ルヲ有テ師管  
若クハ營所アル首邑ヲ過ル時其隊長師  
管若クハ營所ノ司令官ヨリ官位下等ナ  
レハ師管及ヒ營所司令官觀兵ノ式ヲ以  
テ行進セシムルノ權ヲ有ス

第二十四條 凡ソ近衛ノ兵隊東京ノ外他ノ  
管下ニ屯駐シ祭儀慶典ノ事有テ一般ノ

檢閱使

觀兵ヲ催ス時ハ近衛ノ兵隊モ召集ニ應  
ス可シ此時ハ近衛ノ將校ニテモ鎮臺ノ  
將校ニテモ其官位ノ高下ト在任ノ新舊  
トヲ照シ第二等ニ當ル者ヲシテ諸隊ノ  
司令官タラシム可シ

第二十五條 凡ソ諸隊將校下士兵卒進級ノ  
事ノ爲ニ檢閱使各軍管内ヲ巡廻スル時  
ハ檢閱ノ後其作ル所ノ各隊ノ評草ヲ以  
テ之ヲ其所管ノ鎮臺ノ司令將官ニ進納

ス

第二十六條 其司令將官評草ヲ受ケテ自己ノ所見ニ從ヒ商評ヲ加ヘ而シテ後管内諸隊ヲ合シ別ニ一本ヲ繕寫シテ之ヲ直千ニ陸軍卿ニ進呈シ而シテ各隊評草ノ原本ハ猶鎮臺ニ貯フ

第二十七條 其後鎮臺ノ司令將官期日ヲ刺シ各兵ノ檢閱使ヲ會シ自ラ首座トシテ進級表稿本ヲ撰シ此稿本ノ表ト檢閱使

作ル所各隊評草ト併セテ之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第二十八條 凡ソ毎年歲終ニ陸軍卿ノ命ニ因テ近衛司令長官并ニ軍管ノ司令將官北海道司令將官ヲ東京省内ニ會合セシメ將校進級總表ヲ撰定セシメ以テ次年拔擢進級ノ序ヲ定ム以上四條現今未行  
第二十九條 凡ソ管内兵革ノ警アリト雖モ事他邦ト相關涉スル者ハ

司令將  
本令  
務將

天皇興戰ノ權ニ係ルヲ以テ謾リニ一卒  
ヲ動カスヲ許サス但シ萬一火急應セサ  
ルヲ得サル時ハ守戰ノ形ヲ取り之カ爲  
メニ十分據証ヲ有ス可シ

第三十條 凡ソ管内草賊ノ警アリ事火急ニ  
起リ兵力ヲ要シ各府縣ノ知事令鎮臺ニ  
移牒シテ出兵ヲ請フ時ハ之ニ應シ時宜  
ヲ權リ衆寡ヲ量リ兵ヲ出ス事ヲ許ス

第三十一條 凡ソ上條ノ時ニ當リ事緩ニシ

テ時間アレハ府縣ヨリ兩牒ヲ移シ同時  
ニ省并ニ臺ニ報シ臺又速ニ省ニ報シテ  
卿ノ區處ヲ受クルヲ正例トス鎮臺ノ將  
官擅ニ兵ヲ出スヲ許サス

第三十二條 凡ソ草賊ノ警聞アリ其事情測  
リ難キ事アル時ハ鎮臺ノ將官其地方ノ  
知事令ト相議シ參謀部ノ將校ヲ遣シ或  
ハ其地方ノ營所若クハ要塞ノ司令官ニ  
命シテ情狀ヲ探偵セシメ其原由并ニ目

下ノ形勢人數ノ多寡等ヲ知悉シテ逐一ニ開具シ要スル所ノ兵數取ル可キ所ノ策畧ヲ書シ密封ヲ以テ次ヲ逐ヒ卿ニ申報ス可シ

第三十三條 其事狀ノ報告ハ公文ノ例ニ從フト雖モ策畧ノ申告ハ必ス密啓ヲ要シ若シ電報ヲ使用スルモ其露泄ヲ謹シム可シ唯事ノ大小ヲ計リ便宜ヲ以テ事ニ從フハ將官ノ權内ニ在リ

第三十四條 凡ソ管内州縣ノ山野等ニ強盜悍賊アリ拿捕地方警視部ノ力ニ能ハスシテ兵力ヲ要スル時ハ知事令并ニ警視部ノ長官ノ請ニ應シ捕獲ノ方畧ニ於テ力ヲ併スルヲ得可シ

第三十五條 變災若クハ他ノ事故アリ警護ノ爲メ兵備ヲ要シ其地方ノ知事令ヨリ事由ヲ具シテ之ヲ請フ時ハ之ニ應シ事情ヲ斟酌シテ事ニ從フヲ得可シ

第三十六條 凡ソ前數條ニ舉ル所皆臨時若クハ急遽ノ際ニ出ル時ハ服事スルノ後速ニ卿ニ申報スルヲ許ス然レ氏事緩ニシテ往復ノ時間アル時ハ必ス先ツ卿ニ申報ス可シ且警護ノ兵ヲ出ステ常例トナルニ係ル者ハ必ス卿ノ區處ヲ受クルノ後ニ非スシテ服事スルヲ許サ、ル事

第三十七條 凡ツ外國公使ノ送迎鴻臚ノ譙禮朝儀祭典等ニテ警備或ハ觀兵ノ爲メ

ニ兵隊ヲ要シ談事ニ係ル衙門ヨリ事由ヲ具シテ之ヲ請フ時ハ之ニ應スルヲ許ス其部署布置ノ方法ハ一切司令將官ノ任タリ但此等ノ時ニ當リ率テ卿ヨリ下令アルヲ正例トス唯遠隔ノ地下令未タ達セサル便チ此例ニ從フ可シ

第三十八條 凡ソ府縣ノ官至重ノ俘囚ヲ送り陸軍彈藥糧食等ヲ送り或ハ外國人ノ旅行等ニ護送ノ兵ヲ要スル時ハ談事ニ

係ル衙門若クハ官人ノ具狀ノ上ニ地方  
時限ヲ量定レ一部ノ兵ヲ出シ護送ニ供  
スルヲ許ス但シ月報ヲ以テ本省ニ申告  
ス可シ

第三十九條 凡ソ屯營ノ轉移兵隊ノ進退ハ  
卿ノ區處ヲ受ルニ非レハ司令將官謾リ  
ニ之ヲ處分スルヲ許サス又軍伍編制及  
ヒ内外務等ハ本省頒布スル所ノ成則ヲ  
遵守シ一切變更スルヲ許サス

第四十條 其屯營變災若クハ他ノ事故ニ由  
テ一時轉セサルヲ得サル時ハ地方ノ知  
事令ニ牒シ近鄰ノ地ニ於テ便宜ノ場所  
屋舎ヲ撰ヒ假リニ轉移シ急報ヲ以テ省  
ニ申告シ卿ノ區處ヲ受ク可シ但シ其報  
中目下ノ事情向來ノ便宜ヲ縷陳スルヲ  
要ス

第四十一條 其營傍延燒ノ時ハ司令長官速  
ニ近傍場地ニ於テ兵隊ヲ整列セシメ而

後ニ人員ヲ量リ器具ヲ引カシメ防火ニ  
從事セシムル等時宜ニ依リ權宜ヲ制ス  
可シト雖モ勉メテ兵隊ノ混沓ヲ防ク可  
シ

第四十二條 其軍伍隊列ノ編制若クハ内外  
務ニ於テ一時ノ事情ニ因リ若クハ地方  
ノ便宜ニ由テ一二ノ變更ヲ要スル時ハ  
月報ヲ以テ報告シ詳カニ事由ヲ繕陳ス  
可シ

第四十三條 凡ソ管下諸兵隊日課ノ操練ハ  
預ノ卿ノ許可ソ上臺ヨリ指定シタル場  
地ノ外謾リニ他ノ場地ニ於テスルヲ許  
サス若シ實彈試發野營操練等ノ舉ニ就  
テ一定ノ場地ナキ時ハ本臺ニテ一地ヲ  
撰定シ所轄ノ府縣ニ請フテ便宜ヲ議定  
シ本省ニ申報シテ卿ノ許可ヲ受ク可シ  
第四十四條 凡ソ軍人軍屬ソ犯罪軍律ニ屬  
ス可キ者ハ東京ヲ除クノ外成規ヲ照シ

軍法會議ヲ立テ律ニ依テ治斷セシム可シ但シ東京ニ在テハ輕重ニ拘ラズ陸軍裁判所ニ送附ス可シ

第四十五條 凡ソ隊中逃亡アル時ハ該隊ノ司令官同伍若クハ他ノ數人ニ命シ踪跡シテ捕縛セシム可シ若シ能ハサレハ事由ヲ開具シ臺ニ報知シ臺ヨリ其原貫ノ府縣ニ移牒シテ他日捕縛ノ地ヲナシ而後二月報ヲ以テ本省ニ申報ス可シ

第四十六條 凡ソ諸隊ヨリ呈スル定例ノ報告ハ一本ヲ臺ニ留メ一本ヲ以テ臺ヨリ本省ニ移シ定期ニ後ル可カラス

第四十七條 凡ソ管下諸隊定例報告ノ外鎮臺ノ司令將官ヨリ三箇月ノ初毎ニ管内諸隊ノ景況ヲ縷陳スル報告ヲ本省ニ進呈ス可シ其報告ハ次ノ款々ヲ開列スルヲ要ス

第一軍中ノ士氣兵法并ニ政令ニ關涉ス



ル利害如何

第二諸種ノ兵隊軍紀ヲ守リ定規ヲ遵奉  
スル程如何

第三衛戍カルニシ若クハ分屯カニホクニ在ル兵隊ノ舉動  
如何

第四諸兵隊其地ノ住民ト相關渉スル情  
狀如何

第五諸兵隊操練ノ熟不熟如何

第六將官自己ノ論說并ニ改正ノ目的方

略如何

第七軀負外オノカミノ將校就職ノ方法如何

第四十八條 凡ソ管下ノ屯營病院若クハ庖

厨又其他ノ厩舎ニ於テハ司令將官時々

巡廻シ監視ヲ加ヘ部下兵隊ノ為メニ便

利ニシテ妨碍ナキヤヲ察ス可シ

第四十九條 凡ソ屯營病院物品配賦等ノ事

ニ係リテ部下兵隊ノ需要スル項ハ管下

ノ監督部砲兵部工兵部ニ令シテ求メニ

應セシメ新規例外ノ事ハ本省ニ牒告ス可シ

第五十條 凡ソ陸軍卿ヨリ平常鎮臺ノ將官へ移牒スル條款ハ左ノ如シ

第一人員ノ轉任休暇不在差役等下令ノ事

右將校ニ係ル下令ハ鎮臺ノ將官ニ下シ隊中下士兵卒ニ係ル令ハ直ニ該隊ノ司令官ニ下ス

第二兵隊動靜ノ下令并ニ諭旨

右諭旨内ニ目的期限等ヲ巨細ニ述ヘ兼テ路程規則ヲ附ス

第三兵隊ノ編制并ニ就役ノ下令

右モ諭旨ヲ附シテ詳備ヲ悉ス可シ

第四屯營ノ改正修復ノ諭旨

諭旨内施行ノ方法ヲ述ヘ且算計書ヲ附ス可シ

第五入兵後備軍調馬隊軍法學校會計等

ノ事務ニ就テ下令并ニ諭旨

第五十一條 凡ソ鎮臺ノ將官新夕ニ拜命ス

ル時若クハ拜命ノ後初テ鎮臺ヘ赴ク時

ハ左ノ禮款ヲ受ルノ特准ヲ得但シ他ノ

時ニ於テハ陸軍卿ノ特命ニ非サレハ行

フヲ得ス

第一祝砲

第二護衛騎兵一大隊 但騎兵ヲ置サル

ヲ用フ鎮臺ノ在ル府縣郭外ヨリ十町

ノ地マテ旗章音樂ヲ具ヘ隊長之ヲ率

ヒテ迎送ス

第三要塞司令官出迎 其地ノ郭

第四臺下兵隊拜迎 臺下割駐ノ諸兵隊并

過ノ途次ニ於テ戰隊ニ列シ捧銃ノ儀

ヲナシ衛兵哨兵守兵共ニ銃ヲ持シ旗

第五軍隊拜候 皆正服ニテ

第六鎮臺ヲ置ク府縣ノ知事令及參事ハ

到着ノ日ヨリ三日内互ニ存問スヘシ

但官等卑キ者ヨリ先スヘシ

第七其鎮臺ニテ管轄スル府縣ノ知事令  
參事ハ三十日内互ニ移文シテ存問ス  
ヘシ但同上

第八地方裁判所ノ長ハ互ニ僚屬ヲ遣リ  
存問ス可シ但同上

第五十二條 凡ソ鎮臺ノ司令將官初テ臺下  
諸兵隊ノ閱兵若クハ管内ヲ巡行シ管下  
兵隊ノ閱兵ヲ行フ時ハ  
天皇ノ命ヲ奉シ其諸兵隊ニ酒ヲ賜フ

ヲ得可シ

第五十三條 凡ソ鎮臺下并ニ管内營所諸隊

ノ司令官ハ定例ノ期毎ニ部下兵隊ノ景

況疾病康  
平等服役勤惰軍紀賞罰操練ノ了ニ

就テ所轄ノ司令將官ニ之ヲ通報シ又隊

中諸務ニ就テハ其時々報告シテ命令ヲ

受ク可シ

第五十四條 其部下兵隊ノ便宜兵卒ノ生計  
等事或ハ一隊ニ渉ルモ或ハ一人ノ身上

ニ係ルモ總テ經理會計ノ事ニ就テ申告  
セル愁訴該隊ノ司令官查確シテ其實ヲ  
得ハ鎮臺ノ將官ニ申告シテ會計監督副  
監督ニ移シテ處置ヲ請フヲ得可シ但シ  
士官下士兵卒トモ所屬外ニ於テ生計等  
ノ事ヲ申告スルト軍秩ヲ紊ルトヲ許サ  
ス

第五十五條 凡ソ管内營所ノ兵隊モ總テ臺  
下ノ兵隊ニ異ナルヲナシ唯地方ノ騷擾

事非常ニ涉ル者便宜ヲ量定シテ鎮臺本  
省ト地方ヲ異ニスル時ハ兩告ノ例ニ從  
フ可シ

第五十六條 凡ソ各鎮臺ノ間一管内ニ非常  
ノ事變アル時ハ本省ニ報告スルノ外互  
ニ通報遮聞ス可シ但仙臺鎮臺ハ獨り東  
邊ニ在テ他ノ鎮臺ト其間本省アルヲ以  
テ此例ニ在ラス

陸軍省千六百十三號 七月十三日

陸軍敬禮ノ大略歩兵内務書中ニ揭示スト雖  
モ従前履行ノ禮節猶右書中ニ脱漏不少ヲ以  
テ實踐ノ際區々相成不規則ニ付今般彼此取  
纏別冊ノ通相定候間一般施行可致事  
陸軍敬禮式

第一條 凡ソ軍人ハ何レノ場ニ於テモ巳ヨ  
リ上位ノ者ニ對シ必敬禮ヲ行ヒ上位ノ  
者ハ之ニ答禮スヘシ

第二條 兵種ノ別ナク兵隊ハ總テ陸海兩軍

ノ諸將校及ヒ和親諸國ノ海陸軍將校等  
ニ對シ必敬禮ヲ行フ

第三條 敬禮ハ日出ヨリ日没マテノ間ニ非  
サレハ之ヲ行フコトナシ

第四條 敬禮ノ爲ノ兵隊ヲ要スルトキハ首  
トシテ歩兵隊ヲ用フ

第五條 敬禮ハ正服モシクハ定制アル略服  
ヲ著セシ人ニ非サレハ之ヲ行ナフコト  
ナシ

第六條 將校ノ敬禮ハ帽ノ紐ヲ頤ニ掛ルト  
キハ右手ヲ舉ケテ帽ニ及ホス若シ紐ナ  
キ時ハ帽ヲ脱ス

第七條 下士官及ヒ兵卒ハ帽ノ前庇ノ右側  
ニ右手ヲ當テ掌ヲ外面ニ向ケ肘ヲ舉ケ  
テ肩ニ齊クシ敬スヘキ人ニ注目ス  
椅子ニ掛リタル下士官及兵卒ノ將校ニ  
敬禮スルトキハ椅子ヲ離レ立テ其人ニ  
向ヒ禮ヲ行フ

總テ下士官兵卒ノ將校ニ對話スル時ハ  
軍人ノ姿勢ヲ正ス可シ若シ兵卒畧帽ヲ  
冠ル時ハ之ヲ脱キ將校ヨリ著帽ヲ許ス  
マテハ帽ヲ手ニ持ツヘシ

第八條 將校若シ手ニ刀劍ヲ持ツ時ハ左ノ  
法ヲ以テ禮ヲ行フ其式三節アリ

第一節 敬禮ヲ受クヘキ者已ヨリ六步  
前ニ来ル時ハ刀劍ノ銳尖ヲ上ニシ之  
ヲ直線ニシ刃面ヲ右眼ノ前ニ構ヘ錐

ヲ舉ケテ肩ニ及ホシ肘ヲ身體ニ接著  
ス

第二節 右腕ヲ伸シ刀劍ヲ下ケ劍ヲ握

リタル指ノ爪ヲ上ニ向ケ其手ヲ右股

ノ脇ニ著ケ禮ヲ受クヘキ人ノ已ヨリ

六歩先キニ過キ去ルマテ此姿勢ヲ存

ス

第三節 再ヒ刀劍ヲ舉ケ刃面ヲ右肩ニ

當テ銃ヲ肩ニ執ルノ姿勢ヲナス

第九條 書翰使タル下士官兵卒ハ士官ニ書

翰ヲ呈スルニ必ス左手ヲ以テシ而シテ

二三步引退キ返簡或ハ請取書ヲ待ツヘ

シ若シ將官或ハ上長官ニ書翰ヲ呈スル

時ハ銃ヲ捧ケ敬禮シ之ヲ左手ニ保持シ

右手ニテ書翰ヲ呈ス

若シ命令使タル時ハ大凡ニ步隔タリテ

禮節ヲ行ヒ務テ冗長ノ縷言ヲ省キ明亮

ニ之ヲ陳述シ其返答ヲ待ツヘシ其他ノ



動作ハ上文ニ同シ

總テ命令使或ハ書翰使ヲ勤ムル下士官  
兵卒ハ士官ノ近傍ヲ過ル時ハ歩ヲ止メ  
ス直ニ銃ヲ右肩ニ執リ敬禮ヲ行フ

第十條

番兵ハ已ノ位置ニ立テ正面ヲナシ  
禮ヲ受クヘキ者已ヨリ六歩前ニ来リシ  
時位階ニ應ジ銃ヲ肩ニ執リ或ハ銃ヲ捧  
ケ已ヨリ六歩過キ去ルマテ此姿勢ヲ存  
ス

番兵ハ 天皇及 太上天皇太皇太后皇  
太后皇后 皇太子皇族將官上長官并ニ  
同等ノ諸官ニ對シ銃ヲ捧ケテ敬禮ヲ行  
フ

士官及同等ノ諸官ニ對シテハ銃ヲ肩ニ  
執ル  
略服ヲ著セシ諸將校若クハ下士官ノ通  
行スル時ハ不動ノ姿勢ヲナシ正シク銃  
ヲ腕ニ執リ或ハ銃ヲ足傍ニ執ル

第十一條 天皇及太上天皇太皇太后皇后皇太子皇族大臣參議諸省使ノ長官將官ニ行フ所ノ敬禮ハ第十二條ヨリ第十八條迄ニ詳ナリ

第十二條 天皇兵營アル地ニ 行幸アル時ハ該地ニ在ル所ノ各種兵隊皆武器ヲ執ル歩兵隊ハ 行幸ノ街上ニ於テ左右ニ分レ堵列ス 兵卒ハ劔ヲ装シ銃ヲ捧ケ喇叭ハ「アウシ

アムヲ奏シ將校ハ劔ヲ以テ敬禮シ軍旗モ亦禮式ヲ行フ 天覽及 行幸ノ途上ニ在ル諸隊ニ於テモ上文ノ同法ヲ以テ敬禮ヲ行フ 兵隊行進中若シ 行幸ニ出遭トキハ直チニ其歩ヲ止メ戰隊列ヲナシテ敬禮ヲ行フ 行在所ノ儀仗兵ハ一大隊或ハ半大隊トス少佐若クハ故參ノ大尉之ヲ指揮ス

天皇其地 發御ニ於テモ尚 著御ト同  
 法ヲ以テ嚴重ニ敬禮ヲ行フ  
 天皇布陣ノ地ニ 行幸アル時ハ兵隊ハ  
 ソノ前面線ニ於テ戰隊列ヲナシ上ニ著  
 ハス所ノ法ヲ以テ敬禮ヲ行フ  
 天皇ノ儀仗兵ハ 著御前二十四時間  
 發御後二十四時間ハ 天皇ノ外禮式ヲ  
 行ハス  
 但番兵ハ此例ニアラス

近衛又ハ各地方行在所ノ守衛兵ニ於テ  
 ハ諸官員ニ對シテ唯番兵ノ三敬禮ヲ行  
 ヒ哨兵<sup>ボスト</sup>ハ 天皇ニ非サレハ敬禮ヲ行フ  
 ナシ

第十三條 太上天皇太皇太后皇太后皇  
 太子ノ行啓ハ 天皇ト同法ヲ以テ敬禮  
 ヲ行フ尤 天皇同行ノ時ハ 天皇ノ外  
 別ニ禮ヲ行ハス

第十四條 皇族ハ其地發著共同法ニテ該地

ニ在ル所ノ歩兵隊二分ノ一ヲ出シ途上  
ニ堵列シ敬禮ヲ行フヘシ  
儀仗兵ハ兵隊百人ニシテ大尉之ヲ指揮  
ス

第十五條 三職諸省使ノ長官ハ其地發著共

同法ニテ該地ニ在ル所ノ歩兵隊四分ノ  
一銃ヲ執テ敬禮ヲ行フ然レ氏堵列ヲナ  
サス唯其通行途上ニ於テ戰隊列ヲナシ  
銃ヲ捧ケ喇叭「アウシヤ」ヲ奏シ軍旗亦

禮式ヲ行ヒ將校ハ上長官ノ三劔ヲ以テ  
敬禮ス

儀仗兵ハ兵隊六十人ニシテ大尉之ヲ指  
揮ス

總テ 皇族三職諸省使ノ長官へ前ニ著  
ス所ノ敬禮ハ其公事ニ依テ鎮臺或營所  
アル地方發著ノ節又東京ニ在テハ其時  
時太政官ヨリ賜ハル威儀譬ハ遣外國大  
使陸辭ノ時等ノニ適用ス

第十六條 大将或ハ大将ノ職務ヲ奉スル中

将ニハ陸軍卿ト同等ノ敬禮ヲ行フ

儀仗兵ハ兵卒五十人ニシテ大尉之ヲ指

揮シ番兵二人トス

第十七條 中将兵隊ノ前ニ来ル時ハ兵隊戰

隊列ヲナシ銃ヲ肩ニ執リ喇叭ハ口ヲペ

ールヲ奏シ軍旗亦禮式ヲ行ヒ上長官ノ

三劔ヲ以テ敬禮ス

儀仗兵ハ兵卒五十人ニシテ大尉之ヲ指

揮シ番兵二人トス

第十八條 少将兵隊ノ前ニ来ル時ハ兵卒銃

ヲ肩ニ執リ喇叭ハ用意ヲナスノ三ニテ

上長官及軍旗ハ禮式ヲ行ハス

儀仗兵ハ兵卒三十人ニシテ中尉又ハ少

尉之ヲ指揮シ番兵一人トス

總テ将官ハ始テ鎮臺ニ到ル時交代出發

ノ時及少将ハ旅團ノ司令官トナリテ始

テ鎮臺ニ到ルトキハ其著到ト出發ノ節

ノ三儀仗兵アリテ常ニハ番兵ニ用フヘ  
キ適宜ノ兵員ヲ置キ下士官之ヲ指揮ス  
將官檢閲ヲ行フ時ハ其隊ノ司令官直チ  
ニ將官ノ前ニ進ミ劔ヲ以テ敬禮シ側ニ  
待シテ命令ヲ受クヘシ而シテ其時間ハ  
隊列ノ方ヲ避ケ將官ノ見通シヲ妨ケサ  
ルヲ要ス

第十九條 銃ヲ執リタル兵隊途止ニテ行逢  
フトキハ其行進ヲ止メス兩隊ノ兵卒皆

銃ヲ肩ニ執リ喇叭ハ「マルス」ヲ奏シ兩隊  
ノ隊長俱ニ劔ヲ以テ敬禮シ軍旗亦禮式  
ヲ行ハシム之ヲ行フニ踟躕スヘカラヌ  
途上ノ行換ハ各隊巳ノ右方ニ寄りテ行  
進ス障碍アル場所ニ於テハ騎兵ヲ先進  
セシメ次ニ歩兵ヲ行進セシム  
第二十條 兵隊哨兵ポストノ前ヲ行進スル時ハ第  
十九條ニ著ス所ノ法ヲ以テ禮ヲ行フ哨兵  
ハ第二十三條ニ著ハスコトキ法ヲ以テ

答禮ヲナス

第二十一條 分列式ヲ行フハ 天皇及左ニ

著ス所ノ諸官ニ限ル

第一 天皇及 太上天皇太皇太后皇太

后皇后皇太子

第二 陸軍卿及大將中將少將

第三 隊ノ長タル上長官或要塞ノ司令

官

天皇及 太上天皇太皇太后皇太后皇后

皇太子皇族ノ前ニ於テ分列式ヲ行フ時  
 ハ其隊ノ司令官及上長官諸級ノ士官皆  
 劔ヲ以テ敬禮シ軍旗亦禮式ヲ行フ  
 陸軍卿及大將中將ノ前ニ於テ之ヲ行フ  
 時ハ其隊ノ司令官及上長官ノ三劔ヲ以  
 テ敬禮シ軍旗亦禮式ヲ行フ  
 少將以下隊長ノ上長官並ニ要塞司令官  
 ニ之ヲ行フ時ハ其隊ノ司令官劔ヲ以テ  
 敬禮シ上長官及軍旗ハ禮式ヲ行ハス

此祝砲式ハ  
海岸砲臺ニ

會計部及軍醫部士官馬醫其餘同等ノ諸  
官ハ分列ヲナサス檢閲ノ時間右諸官ハ  
隊面中央ニ向テ姿勢ヲ正スヘシ分列ノ  
時間ニ於テハ當日出張セシ隊外諸將校  
ト俱ニ分列式ヲ受ル將官ノ後方三歩ノ  
地ニシテ兵隊行進ノ方ヲ避ケ右或左ニ  
位ス

第二十二條 天皇及 太上天皇太皇太后皇  
太后皇后皇太子ノ祝砲ハ陣所又ハ諸地

在テ外國帝  
王及ト使節  
ノ乗艦ニ對  
シ祝砲スル  
トキ若クハ  
應砲スル時  
等ハ適用セ  
ス正レノ時  
因公法條規  
即チ海軍ニ  
テ定メタル  
祝砲式ヲ用  
フヘシ

ニ 著御及 發御ノ時百零一發

皇族ハ二十一發

陸軍卿海軍卿ハ十九發

三職諸省使ノ長官ハ十五發

大將或大將ノ職務ヲ奉スル中將ハ十一

發

中將ハ 其管内ニ於テ 五發

第二十三條 哨兵ニ於テ敬禮ヲナスニハ皆  
門外ニ出テ左ノ順次ヲ以テ禮ヲ行フ



兵卒九人以下ハ一列ニシテ十人ヨリ以  
上ハ二列トス

哨兵ノ長官士官ナル時ハ劔ヲ執テ隊列  
中央前ニ二歩進ミ自餘ノ士官ハ押伍列  
ニアリテ第一軍曹ハ右ニ列シ第二軍曹  
ハ左ニ列シ其餘ノ軍曹及ヒ伍長ハ皆押  
伍列ニ立ツ

哨兵ノ長官下士官ナル時ハ隊列ノ右ニ  
在テ第一伍長ハ左ニアリ第二伍長ハ押

伍列ニ立ツ

喇叭ハ第一列右頭ヨリ二歩右ニアルヘシ  
天皇及 太上天皇太皇太后皇太后  
皇太子哨兵ノ前ヲ 行幸アル時ハ哨兵  
銃ヲ執テ戰隊列ヲナシ

天皇隊列ヨリ二十歩前ニ 進御アル時  
ハ哨兵皆銃ヲ捧ケ喇叭ハ「マル」スヲ奏シ  
士官ハ六歩前ニ 進御ノ時劔ヲ以テ敬  
禮シ隊ヨリ二十歩先ニ 進御アル時銃

ヲ肩ニ執リ哨兵所ノ内ニ入ル  
 皇族及三職諸省使ノ長官ニハ同法ノ敬  
 禮ヲナスト雖氏唯兵卒銃ヲ肩ニ執ルノ  
 三  
 大將中將ニハ兵卒銃ヲ肩ニ執リ喇叭ハ  
 口ヲペールヲ奏ス  
 少將ニハ兵卒銃ヲ肩ニ執リ喇叭ハ奏セ  
 ス  
 武裝シタル兵隊哨兵ノ前ヲ通過スル時

ハ哨兵ハ門外ニ出テ戰隊列ヲナシ兵卒  
 ハ銃ヲ肩ニ執リ喇叭ハ「マル」ヲ奏ス  
 營門ノ哨兵ハ右同法ヲ以テ將官ニ禮ヲ  
 行フ其隊ノ司令官營内ニ來ル時ハ哨兵  
 銃ヲ執ラスシテ戰隊列ヲナス

陸軍省三十五號八月八日

各地方ニ於テ頑民暴動ノ節鎮壓ノ為メ各管  
 轄廳ニテ貫屬士族等相募リ隊伍組立兵士ノ  
 名目ヲ下シ為致防禦候向モ往々有之右ハ陸

軍ノ權限ヲ犯シ甚不都合ニ付以來決シテ不相成候勿論鎮臺隔絶ノ場所等ニテ情形不得止一時ノ權宜ヲ以テ致從事候儀ニハ可有之候得共一昨辛未八月諸縣解兵發令後ハ鎮臺ヲ除クノ外兵隊ノ名義無之筈ニ就キ心得違無之様可致此旨相違候事

但士卒等ヲ以テ便宜捕亡爲致候儀ハ於當省關係不致候事

布告類編卷之四終

